

知的障害児に対する子どもとの向き合い方、および体育指導のあり方に関する研究 ～A. H. マズローの人間観の視点から～

発表者 砂川絵里佳
指導教員 日下 裕弘

キーワード：ボランティアの実践事例、あるがままを受け入れる、ラポール、信頼関係、主体性、可能性、自己実現、遊戯療法、ムーブメント教育

1. 緒言

本研究は、A.H.マズローの人間観の視点から、知的障害児に対する子どもたちとの向き合い方および体育指導のあり方について、特に、ボランティアの実践事例を通して考察することを目的としている。

2. 分析枠組み

2-1 A. H. マズローの人間観

1) 欲求階層説

「人間性の心理学」(1987)の著者 A. H. マズローは、人間を自らの可能性と自己実現を求めて主体的に成長し続け得る存在と観る。彼の代表的な理論として「欲求階層説」が挙げられるが、この理論は、人間性の多面的で包括的(inclusive)なパースペクティブのもとに構築されたものである。

A.H.マズローが示す欲求階層説では、基礎的なものから、生理的欲求、安全の欲求、所属と愛の欲求、承認の欲求、自己実現の欲求の順で、欲求が5段階に分かれている。このうち、生理的欲求から承認の欲求までを「欠乏欲求」と呼び、これが満たされた人間は、自己実現を追求する「成長欲求」の段階へ移行すると定義される。

2) Be 価値

Be 価値とは、存在すること Existance 価値と共存 Coexistence の価値をあわせもつものである。

Be 価値は、人間の可能性が至高経験にまで高められた時の完全なる理想的な魂のあり方であるが、そのあり方を実現させているのは階層的な欲求をもつものとしての人間のパーソナリティなのである。その①「あるがままの全体性」、②「生命のあたたかさ」、そして③「リズムとハーモニー(共存)」といった価値は、すべての欲求の層を貫徹しているものと考えられる。

2-2 特別支援教育における保健体育の目標と内容・領域

これらを健常児童・生徒の学習指導要領と比較すると、その目標、内容、領域に関する限り、大きな差はみられない。

問題は「一人ひとりにあった方法」にある。

文部科学省発行の特別支援学校指導要領には、「指導計画の作成にあたっては、個々の児童の知的障害の状態や経験等を考慮しながら、各教科の相当する段階の内容の中から実際に指導する内容を選定し、配列して、具体的に指導内容を設定するものとする。」と記載されている。このように、特別支援教育においては、健常児童・

生徒に比べて、一人ひとりの発達の個人差が極めて大きい。この実態をどう克服するかが現場の大きな教育課題なのである。

3. 考察～ボランティアの実践事例から～

ボランティアの実践事例で学んだことを A.H.マズローの人間観(欲求階層説)に当てはめ、全体を整理したものが図3である。

- ①教師と家庭の連携による子どもの成長について～一貫した善悪のしつけによる子どもの保護～
- ②絵画療法による心のケア～好きなものの自由な表現と笑顔～
- ③学級経営について～子どもを受け入れる環境、安心な居場所～
- ④特別支援学級の問題について～一人ひとりの子どもを中心とした支援者の協力体制～
- ⑤一般生徒との交流が生活に及ぼす影響～理解し、受け入れてくれる仲間、思いやりと笑顔～
- ⑥「相手の立場(身)になって物事を考える」ことについて～承認:人としての心のバリアフリー～
- ⑦自閉症児に対する支援のアプローチについて～自尊:視覚によるコミュニケーションの活用～
- ⑧「言葉かけ」による「信頼関係」の形成について～ラポール、主体的な気づきと学び～

〔遊戯療法の見方〕

遊戯療法の本質は、「信頼と共振」である。つまり、遊戯療法ではセラピストと子どものラポールと信頼関係が重要になる

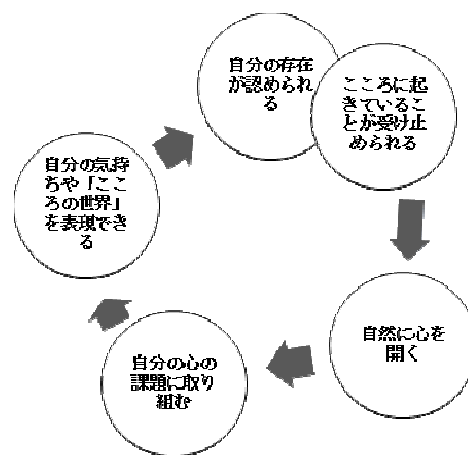


図1 「こころの世界」を表現するまでの過程

こころが成長するためには、遊びだけでなく、子どもをありのままに受け止める存在、そしてその存在とのラポールと「信頼関係」が必要である。またその存在との「共振」によって、子どもだけ

でなくセラピスト自身も成長することが出来る。

- ⑨褒める教育について~社会的承認による主体性・積極性の喚起~
- ⑩集中力を持続させるには~自由の巾による自立的な学び~

〔ムーブメント教育の見方〕

ムーブメント教育の本質は、「動くことの喜び」である。

ムーブメント教育を通して「遊び的要素」を運動に取り入れ、訓練のような活動ではなく「楽しみながら」運動をすることで、子どもは基礎的な運動技能を習得し、動くことを学び、動きを通して「喜び」を感じることができるのである。

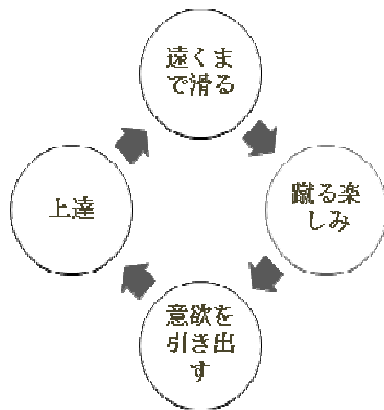


図2 カラーフープのムーブメントを使った学習の循環

「動くことの喜び」には、「喜び」の他に、動くことが出来たことへの「自信」、成功した時の「達成感」、そして他者からの「理解」が含まれる。「自信」「達成」は自己承認の欲求に当てはまるものであり、「理解」は他者からの承認に当てはまる。つまり、ムーブメント教育を通して子どもは運動技能の習得、身体意識の形成を図り、心理的諸機能を高めるだけでなく、自己および他者を承認することを学んでいくことになる。

4. まとめ

子どもとの向き合い方において、あるがままを受け入れることが最重要なキーワードであると考えられる。そこで二者間にラポール(親和感)が生まれ信頼関係となる。遊技療法やムーブメント教育は、子どもの主体性、可能性を伸ばすことを可能にし、その可能性、主体性が自己実現に繋がるのである。

これまで、A.H.マズローの人間観と学習指導要領を分析の枠組みとし、いくつかの実践事例を遊戯療法と運動教育の視点を加えて考察してきた。

本論文の主題である、知的障害児との向き合い方や保健体育のその指導方法を考える場合、「一人ひとりの子ども」をとりまく支援者の協働(様々な支援の和)が不可欠となる。

すなわち、学級担任、各教科の教師、養護教諭、特別支援コーディネーター、ボランティア、支援員、医師、看護師、そして家族、といった人々の協力体制である。可能性を追求して主体的に成

長する「一人ひとりの子ども」を中心とした支援の和が必要になる。(図3)

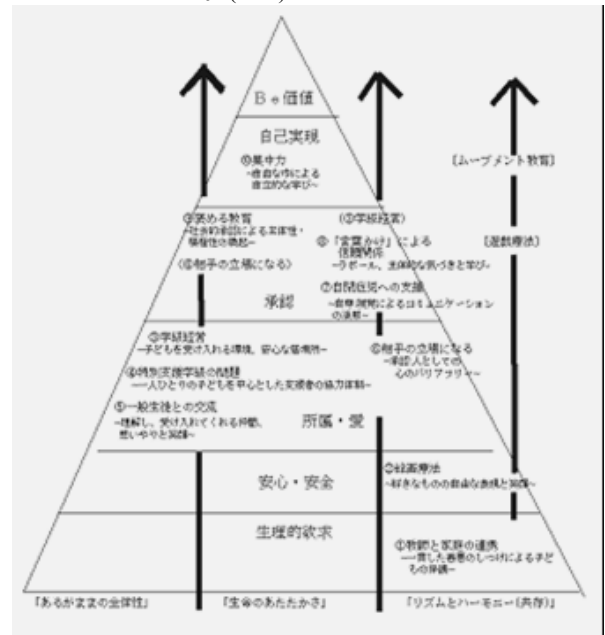


図3 A.H.マズローの人間観とボランティアの実践事例

5. 今後の課題

今後はより多くのボランティア実践の経験を積み、さらに考察を深めていくよう努力をする所存である。

6. 文献

- 1) 安島智子. 2010. 『遊戯療法と子どもの「こころの世界」』(金子書房) pp.1-9
- 2) V.M.Axline : 小林治夫 訳. 1996. 『遊戯療法』(岩崎学術出版社) pp.95-96
- 3) 深谷和子. 2008. 『遊戯療法 子どもの成長と発達の支援』(金子書房) pp.84-112
- 4) Frank G Goble : 小口忠彦 監訳. 1974. 『マズローの心理学』(産業能率短期大学出版部刊) pp.35-83
- 5) 金川朋子. 2008. 『特別支援学校におけるムーブメント教育について』大阪教育大学紀要第四部門第57巻第1号 pp.77-85
- 6) 小林芳文・是枝喜代治. 1993. 『子どものためのムーブメント教育プログラム 新しい体育への挑戦』(大修館書店) pp.19-30
- 7) 日下裕弘・加納弘二. 2010 『生涯スポーツの理論と実際 改訂版』(大修館書店) p.86 , pp.190-193
- 8) A.H.Maslow : 上田吉一 訳. 1964. 『完全なる人間 魂のめざすもの』(誠信書房) pp.106-137 など